

作家 古谷田奈月さんとの座談会



高須万悠香さん(元生徒会長)



佐藤陽生さん(元学年委員長)



箱守麻衣さん(元図書委員長)



宮本哲平さん(元図書委員副委員長)

手賀沼のほとりでは、かつて白樺派の文人たちが執筆活動を行っていました。昨年5月には文学界の期待の新鋭に贈られる「三島由紀夫賞」、7月にはSF・ファンタジーでジェンダーについて深く考えさせる作品に贈られる「センス・オブ・ジェンダー賞」を受賞し、新進作家による純文学の中・短編作品のなかから、最も優秀な作品に贈られる「芥川龍之介賞」の候補にも選ばれた作家、古谷田奈月さんと母校の湖北中学校で座談会を行いました。

市長 小説はいつごろから書き始めたんですか。
古谷田 本格的に書き始めたのは26歳くらい。作家としてはずいぶん遅いんです。だけど場面みたいなものが断片的に浮かぶようになり、それを書くことは小学生のころから、大きくなってもずっとやっていました。
子どものころから読書は好きでしたが、だから小説家になろうと思ったわけではなく、単にそういう性質を持って生まれてきたのかなと思います。
市長 最新の作品『望むの』(※1)では、隣のおぼさんがゴリラというあの発想にはびっくりしました。古谷田 いろんな人がいて何となく尊重し合える。無理して理解し合わなくても「あいつ、変だよね」ぐらいが理想だと思っているんです。例えばこの中にゴリラがいたら「うわあゴリラだよ」って思いますけど、その違和感込みで成立する、そんな世界になると良いなと思って書きました。

ベンチに座って 手賀沼を見る

市長 以前、上橋菜穂子さん(※)から、筆が止まると手賀沼の周辺を歩くと聞いたことがあります。そのような場所がありますか。古谷田 私も手賀沼ですね。特に手賀沼公園。沼が見えやすいように作ってあり、ベンチに座って手賀沼を見ているから、脳に刺激を与えてくれるんです。水辺がある所に住めるのは、ものを作る人間としては、ラッキーだと思います。



▲手賀沼公園

市長 志賀直哉や武者小路実篤など、大正時代の白樺派の文人たちは手賀沼に惹かれて我孫子にきました。上橋さん、古谷田さんと、今までずっとつながっているのかがあって思っていますね。古谷田 つながっていますよ。絶対。当時は思い浮かべて手賀沼に行くと、どれだけきれいだったろうって思います。文人たちが集まってくる理由が分かります。きれいです。本当に。

に情景や物を音でイメージができるんですか。古谷田 音楽や色彩は、私にはないものがほとんどです。登場人物としてなら書けるんです。私では書けないけど、『ジュンのための6つの小曲』(※2)だったら、ジュンのつもりで書くからあのような音の描写ができる。本の中の登場人物と親しくなる。付き合いが深いほど、私には無いイメージが書けるようになるんです。
高須 手賀沼の他に我孫子でお気に入りの場所ありますか。古谷田 アビスタですね。自分にとっても良い場所。たくさんの方が集まってくる。私みたいに一人である人もいれば、家族や学生もいて老若男女という感じ。環境が良い場所。自然と人が集まり、思い思いに過ごすんだ。他には水の館の辺り。やっぱり水辺ですね。
高須 本に出てくる登場人物はモデルがいたりするんですか。古谷田 私の場合は私自身のある部分だけをすごく強調して一人の人間にしているかな。特定のモデルがいるということはないです。
佐藤 どうして今の仕事を選んだんですか。古谷田 選んだ、ということとは本当になくて、書くことが好きだったこと、集団生活ができなかったこと、自然とこうなりました。実は私は不登校児で、この湖北中にも半分くらいしか通っていないんです。いじめられていたわけではな



く、友だちもたくさんいたけど、集団の中に居続けるということがどうしてもできなくて。集団の中で生きていけないというところは会社勤めもできない、じゃあ自分は何ができるかっていうところから、自分から本は読んでいたけど、20歳を過ぎてから読んでサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』がすごく好きです。箱守 これからやってみようか。古谷田 書いてる時間が一番楽しくて。でも、趣味や目標があったほうがいいよ。これから探します。箱守 私は文章を書くのが苦手なのですが、書く時のコツとかありますか。古谷田 「こういう感じで

書きたい」と思うものを真似ることが良いと思う。たとえば、お手本になる作文を一回全部写す。丸写しすると、文章のつながりやリズムが見えてくるんです。まずはうまい人の作文を写してみよう。古谷田 小説を書くのには一番苦労することは何ですか。古谷田 小説は書くのにすごく時間がかかるんです。私の場合は、考えている時間がとても長いし茫然と「どうしよう」みたいな書き始めて、一生懸命頑張って6時間くらい書いても最終的に5行しか書いてないこともある。書いて消しての繰り返し。毎日そういう小さい挫折感を味わっていて、それがすごくしんどい。一つになったらできあがるの？って感じがでたらしくなってしまう。でも、その事に対して負けない。ちょっとでも進んでいる。5行しか進んでいないではなく「5行も進んだ、すごい」って自分を褒めているんです。
本を読んでもらう努力をしています
宮本 図書委員として本をたくさん読んでもらえるように努力しています。中学生にお勧めの本ってありますか。古谷田 本は人それぞれだと思っんです。合わない本とは、いつまでも付き合わなくていいと思う。読んでもらえるためには自分にとっての本との出会いを作ることが良いかな。たとえば図書委員たちが、読んで面白かった本を口コミみたいな感じで薦めると興味を持ってもらえるかもしれない。箱守 図書委員では、お薦めの本を学年で分けたり、

※上橋菜穂子さん…平成26年、児童文学のノーベル賞といわれる「国際アンデルセン賞」の作家賞を受賞。著書の『精霊の守り人』をはじめとする「守り人シリーズ」や『獣の奏者』は外国語でも翻訳され、国際的に高く評価されている。市内で執筆した「守り人シリーズ」などの代表作には、後書きに「我孫子にて」と記している。平成26年に我孫子市民文化スポーツ栄誉章を贈呈。